

山王遺跡 1

—山王遺跡群第2次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第878集

2006

福岡市教育委員会

山王遺跡 1

—山王遺跡群第2次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第878集



遺跡略号 SNN-2
調査番号 0459

2006

福岡市教育委員会

序

福岡市では北方に広がる玄界灘の海を介し、大陸と人、物、文化の交流を絶え間なく続けてきました。この地の利を生かした人々の歴史を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれ明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術、文化を示す貴重なものも多く、学術研究上、注目されているところです。

今回の発掘調査は弥生時代において「奴国」の拠点の一つとして全国の中でも特に繁栄を極めたと考えられている比恵遺跡群に隣接した山王遺跡群に位置しています。調査では中世の水路や集落のはか、比恵遺跡群との間を隔てる谷が発見され、弥生時代から中世までの自然地形をいかした土地利用を考察する上で貴重な資料を得ることができました。

本書はこうした調査成果を収めたもので、やむなく、多様な開発で消滅する埋蔵文化財について実施した記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しご協力いただいた関係者各位の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成18年3月15日

福岡市教育委員会

教育長 植木 とみ子

例　　言

1. 本書は福岡市博多区山王1丁目9番において福岡市教育委員会が2004年度に実施した発掘調査報告書である。
2. 調査は荒牧宏行が担当し、遺構図面作成は荒牧、藤野雅基、兼田ミヤ子、小野千佳、高手興志子が行い、遺構写真撮影は荒牧が行った。
3. 本書に掲載した遺物実測は濱石正子、濱田美紀、相原聰子、荒牧、淨書は濱石正子、大石菜美子、荒牧が行った。
4. 本書掲載の実測図、写真、遺物等、調査で得られた資料類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管され、公開、活用されていく予定である。

凡　　例

1. 本書掲載の遺構図方位、座標は日本測地系第2系による。
2. 掲載した遺物は通し番号を付した。

本文目次

I はじめに.....	1	土壤 (SK)	22
1 調査に至る経過.....	1	SK103	22
2 調査の経過.....	1	SK39	22
3 調査体制.....	1	SK102	22
II 位置と環境.....	1	SK30	22
1 山王遺跡群について.....	1	SK18	22
2 地形.....	2	SK14	22
3 歴史的環境.....	2	SK101	22
III 調査の記録.....	6	SK03	22
1 調査の概要.....	6	SK02	24
2 I 区の調査.....	6	SK12	24
(1) 基本層序と地形.....	6	SK15	24
(2) 遺構と遺物.....	11	SK08	24
溝 (SD)	11	SK13	27
SD01	11	3 II 区の調査.....	28
SD33	11	(1) 基本層序と地形.....	28
SD04	11	(2) 遺構と遺物.....	28
SD05	12	溝 (SD)	31
SD06、07	12	SD01	31
SD32	15	SD02	31
SD34~40	15	SD03	31
井戸 (SE)	18	SD04	34
SE10	18	SD05	37
SE09	18	IV おわりに.....	38
SE31	18	* 報告書抄録.....	裏見返し
SE11	18		

挿図目次

Fig1 山王遺跡群位置図 (1/10万)	目次
Fig2 山王遺跡群第2次調査地点 (1/4,000)	3
Fig3 山王遺跡群旧地形図 (昭和初期 1/4,000)	4
Fig4 山王遺跡群周辺地形図	5
Fig5 I 区土層図 (1/40)	7
Fig6 I 区遺構配置図 (1/200)	折り込み
Fig7 SD32土層断面図 (1/40)	13
Fig8 SD01、04出土遺物実測図 (1/3)	14
Fig9 SD04、05出土遺物実測図 (1/3)	15
Fig10 SD06、07出土遺物実測図 (1/3)	16
Fig11 SD35、SX40出土遺物実測図 (1/3)	17
Fig12 SE10、09、31、11実測図 (1/40)	19
Fig13 SE09、10、11出土遺物実測図 (1/3)	20
Fig14 土壌 SK103、39、102、30、18、14、 101、03、02、12実測図 (1/40)	23
Fig15 SK30、02、03、12、15 出土遺物実測図 (1/3)	25
Fig16 SK08、13実測図 (1/40)	27
Fig17 SK08、13出土遺物実測図 (1/3)	27
Fig18 II 区遺構配置図 (1/200)	29
Fig19 SD01、02土層断面図 (1/40)	33

Fig.20 SD03土層断面図 (1/40)	34	Fig.22 SD04土層断面図 (1/40)	37
Fig.21 SD02、03出土遺物実測図 (1/3).....	34	Fig.23 SD05土層断面図 (1/40)	37

写 真

Ph.1 I 区東壁土層 (北西から)	6	Ph.18 SK08甕出土状況	26
Ph.2 I 区南半全景 (北から)	8	Ph.19 SK13土層断面	26
Ph.3 I 区東半 (御笠川を望む 西から)	8	Ph.20 II 区全景 (南東から)	28
Ph.4 I 区南半旧河川検出 (北西から)	9	Ph.21 II 区全景 (遠景 南東から)	30
Ph.5 I 区西半 (丘陵部を望む 北から)	9	Ph.22 II 区全景 (丘陵を望む 西から)	30
Ph.6 I 区北半全景 (北から)	10	Ph.23 II 区全景 (西から)	31
Ph.7 I 区北半全景 (南から)	10	Ph.24 II 区SD02土層断面 (調査区東壁 SD01と切り合い 西から)	32
Ph.8 I 区北半旧河川 (南西から)	11	Ph.25 II 区SD03 完掘 (南東から)	32
Ph.9 SD32土層 (南から)	13	Ph.26 II 区SD03土層断面 (南から)	35
Ph.10 SE10井筒検出	21	Ph.27 II 区SD03内アンカー支柱 (南から)	35
Ph.11 SE09井筒検出 (南から)	21	Ph.28 II 区SD04東岸際 (調査区北壁 南東から)	36
Ph.12 SE31完掘 (北から)	21	Ph.29 II 区SD04東岸際 (調査区南壁 北から)	36
Ph.13 SE11完掘 (北から)	21	Ph.30 II 区SD05土層断面 (南西から)	37
Ph.14 SK30遺物出土状況	24		
Ph.15 SK03完掘状況	24		
Ph.16 SK02完掘状況	24		
Ph.17 SK12完掘状況 (北から)	24		

- 1 山王遺跡群
- 2 比恵遺跡群
- 3 那珂遺跡群
- 4 板付遺跡群

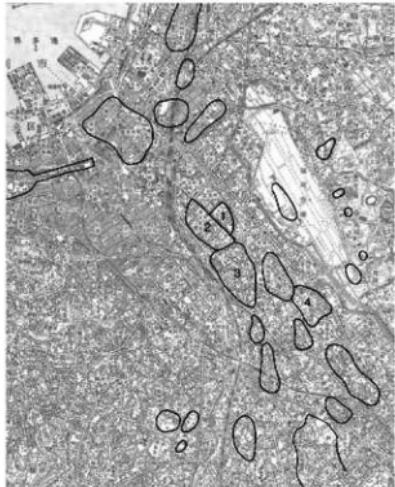


Fig.1 山王遺跡群位置図 (1/100,000)

I はじめに

1 調査に至る経過

平成15年12月18日、近年の御笠川洪水の対策としてその貯水施設を山王公園内に建設することが計画された。この計画に基づく「比恵・山王地区浸水対策事業」に伴って福岡市下水道局建設部より福岡市博多区山王1丁目9番（山王公園内）地内の「埋蔵文化財の事前審査について（依頼）」が埋蔵文化財課に提出された。これを受けて当課では書類審査を行い、試掘調査を平成16年1月21、23日と同年6月30日の2度にわたり実施した。野球場地内の試掘は利用中のために不十分であったが、その結果に基づき調査が必要な箇所を設定して調査期間と費用を提示し、協議を重ねた。発掘調査は平成16年11月1日より調査を開始した。

2 調査の経過

調査区は施設が構築される東側のグラウンド部分と西側の野球場の2カ所に分かれ、I、II区と称した。先に東側グラウンド部分（I区）1,750m²の調査を平成16年11月1日より開始した。外周の遊歩道部分は造構がほとんど無いと判断されることやソイルセメントが敷設されているために表土剥ぎが難しく、また、利用者が多いことなどから調査区から除外してフェンスを設置した。I区の調査は排土置場を調査区内に設ける必要から、南半分の表土剥ぎ、調査を先行し、調査終了とともに反転し、北側の調査にとりかかった。I区全体の調査は平成17年1月19日に終了し、引き続き西側野球場（II区）の表土剥ぎを1月26日より開始した。II区は試掘結果から北西の一部のみが対象地となっていたが、造構の分布状況から幾分広げ1,085m²の調査区とした。また、調査によって検出された谷部（SD04）の状況を確認するために野球場の西側に試掘トレンチをいれた。この試掘も含め、II区全体は他の調査との調整で一時中断もあったが、3月30日に終了した。

3 調査体制

調査・整理作業は以下の体制で臨んだ。

（調査主体）福岡市教育委員会（調査総括）埋蔵文化財課長（前任）山崎純男 調査第2係長 池崎謙二（庶務）文化財整備課 御手洗 浩（試掘調査・協議）事前審査係長 濱石哲也 担当
田上勇一郎 井上蘭子（調査担当）荒牧宏行（調査作業員）黒瀬千鶴 武田潤子 藤野雅基 安高精一 野口リウ子 小野千佳 高手興志子 兼田ミヤ子 酒井次憲 豊丸秀仁 永田八重子 渋谷留雄 濱フミ子 安高邦晴 櫻田信一 知花繁代 坂本久幸 沖政芳 松若俊美（資料整理）松下伊都子 小金丸昌世 大石菜美子 相原聰子

II 位置と環境

1 山王遺跡群について

那珂川と御笠川に挟まれた福岡平野に位置する。平野中央部に洪積台地が南北に細長く連なり、そこに比恵遺跡群が立地する。比恵遺跡群の東側は筑紫通り付近を境にしているが、造構が分布するロームはさらに東側へ延びていることが現在までの調査で確認されている。さらに東側は谷（御笠川の旧河道）が南北へ延びて比恵遺跡群が限られ、その谷部の東岸一帯には低地と微高地が広がる。山王壺棺遺跡群と比恵壺棺遺跡群はその比較的高所の一部に表採されたとする遺物に基づき登録されて

いた。従って地形や遺跡のつながりから厳密に区別されたものではないために今回、両遺跡群を含めた範囲を山王遺跡群として名称および範囲の変更をした。

既往の調査は比恵堀柵遺跡群第1次（福岡市埋蔵文化財調査報告書第625集）が1998年に行われたのみで、これを山王遺跡群第1次調査とする。

2 地形

上述の通り山王遺跡群は洪積台地（中位段丘）上の比恵遺跡群とは埋没谷で隔てられた東側の低地に立地する。この埋没谷は御笠川の旧河道とみられるが、その幅は100mを超すとみられ、本調査のⅡ区では東側の立ち上がりが確認された。

本調査の旧称の山王堀柵遺跡群は第3紀層の小起伏丘陵地に占める。丘陵の形状は前方後円墳に近似するが、関連するような遺物や盛土は現在までみられていない。この丘陵を挟むように御笠川の旧河道や水路が流下し、周辺には沖積地が広がる。（「福岡市土地分類細部調査」福岡市 平成元年3月）

南側に位置した旧称の比恵堀柵遺跡群一帯は第1次調査によると60cmの厚さの客土下に脈のある鳥柄ローム下部が堆積し、遺構が検出される。周辺も同様の地形と思われる。

調査区より北側はこの河口が広がり、西側の那珂川と連結し、その前面に砂丘が形成されている。

3 歴史的環境

山王遺跡群第1次調査（比恵堀柵遺跡第1次調査）では15世紀前半代の井戸から弓を弾く猿を描いた護符状の木製品が出土し、山王を祀る日吉神社との関連が指摘されている。

日吉神社については『福岡県神社誌』⁽¹⁾によれば、その由緒に「不詳、明治五年十一月三日村社に定めらる、社説に曰く、日吉又は山王宮とも称へ比恵山の上に鎮座し給へり、古此の邑に日吉神社を祀りて一村の産神とし奉る、然して此邑を比恵といひ山を比恵山（山王山とも称す）といへり。時に山の茂りのあさはかにて宮居あらはなし故にや其のほとりに大路ありて馬に乗り社前に打通りける人に必ず崇り給ひて往来のなやみありしかば、里人これを憂ひて御社を社のかたへにうつし奉りぬ。其後は神の心おだやかに成り給ひしにや重ねて下馬の谷もなく久しき年を経たり。然るに此宮所は卑濕の地にて畢竟宮所に宜しからざれば、里人又相共に力をあはせ寛文六年丙午五月に御社をもとの山上に復し奉る石鳥居は元禄十一年建之。其時宮所の地を整理せしが、昔神殿の有けるあたりより一の石の樋を掘り出せり、其中に銅にて作りたる圓き形なる物あり是をよく穿鑿すれば疑ひもなき心の御柱なり・・・（中略）斯くの如く代々藩邸の尊崇篤かりしが殊に大守黒田忠之公は信奉深くして年毎に代参ありき。又かつて書工に命じて猿の絵を寫さしめ寄進し給ひたり。」とある。

この文中に注目すべきことが幾つかあるが、まず、「其のほとりに大路ありて」と道の存在を示している。おそらく上述の旧河道もしくは埋没谷の際沿に通っていたと思われるが、丘陵の東西どちら側であるか不明である。また、移した「社のかたへ」は丘陵際の埋没した旧河道もしくは谷部と思われ文中のように湿地であったとみられる。なお、埋没谷を隔てた向こう側には古代官道が推定されている。既往の調査で中世の利用が考えられているが近世においては不明である。

次に丘陵上で発見された「石の樋」と「銅にて作りたる圓き形なる物」であるが、この丘陵の形状が極めて前方後円墳に近いものであることは昭和初期の地図にても明らかであり、大いに注目される部分である。

最後の「猿の絵」については上記の山王信仰をひくものか、境内に祀られている庚申社の信仰によるものか判らない。

(1)『福岡県神社誌』 大日本神祇会福岡県支部 昭和十九年



2379 山王遺跡群 0127 比恵遺跡群 0128は(旧)比恵妻宿遺跡

Fig.2 山王遺跡群第2次調査地点 (1/4,000)

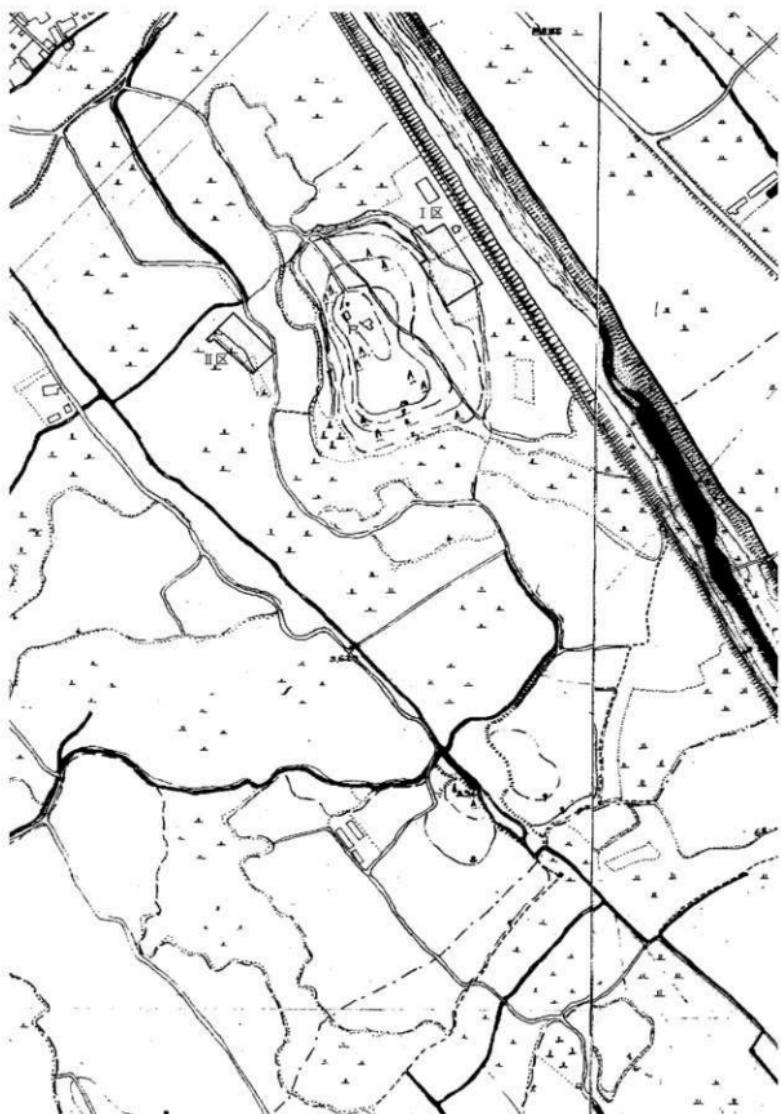


Fig.3 山王遺跡群旧地形図（昭和初期 1/4,000）



Fig.4 山王遺跡周辺地形図

「福岡市土地分類細部調査 報告書」平成元年3月 福岡市 付図（地形分類図）に一部加筆

III 調査の記録

1 調査の概要

Iで記した通り調査区は公園北東部のグラウンド（I区）と北西部の野球場（II区）に分かれる。I区は以前、山王堀遺跡群として登録されていたが、本調査では堀は出土していない。検出された遺構は西側丘陵裾部に営まれた集落に伴う柱穴、土壤と東側御笠川に沿う方向の流路、水路である。出土遺物の時期は弥生時代から近世におよぶ。

沖積地のII区では集落遺構は無く、水路と西側の洪積台地にのる比恵遺跡群との間を隔てる谷部が検出された。水路の時期は中世から近世に及ぶ。

2 I区の調査

(1) 基本層序と地形

西側は丘陵の裾が北側へ緩やかに傾斜していく地形であったと考えられるが、厚さ60cmの現代客土下で検出される赤褐色粘質土の地山は標高5m以下の平坦地に削平されている。遺構もSK02が残存するのみで他は消滅している。削平を免れ遺構が検出されるのは中央を北西方向へ流下していくSD01、33に沿った部分である。この周辺は北側への傾斜がみられ、褐色土が地山の上部に薄く堆積する。地山はややグライ化した黄褐色に変化していく。さらに東側はIIで記したように丘陵を開析し北西方向へ流下していく御笠川の旧河道が検出され、水路もこれに平行している。

調査区東壁の旧河道内土層（Fig.5）をみると現代客土下に現代の水田土壤（2層）、その下に以前の水田土壤がマンガンの集積層と互層になった（3層）がみられる。さらに下層の4層から中世までの遺物を含むグライ化した灰色粘質土が堆積する。地山とした最下底の明黄褐色土6層から下層の灰白色粘土中は無遺物ではあるが流木が含まれ、旧河道の下底はさらに急激に深くなっているものと考えられる。



Ph.1 I区東壁土層（北西から）

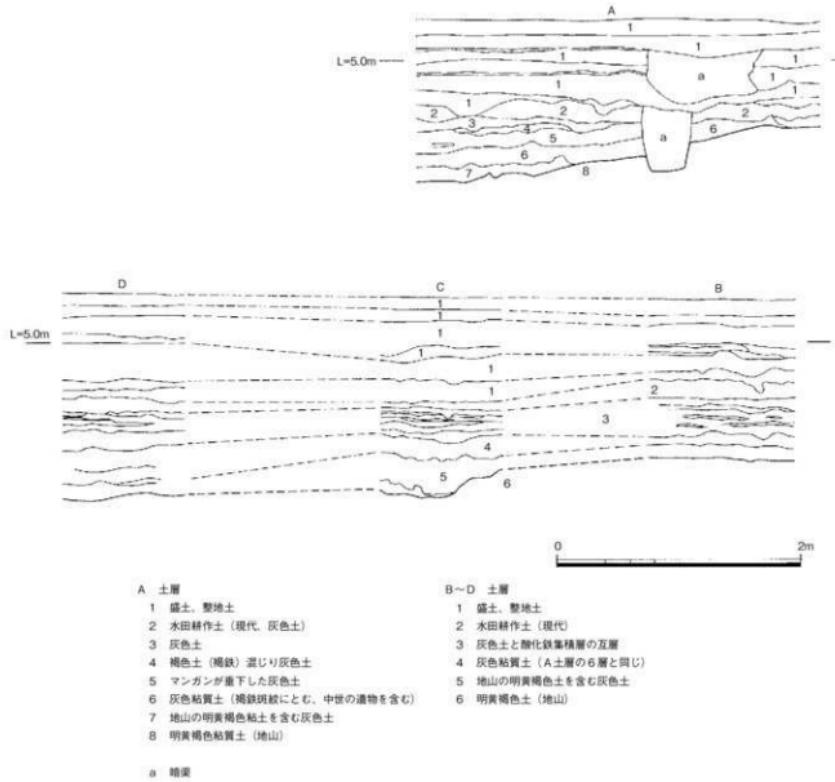
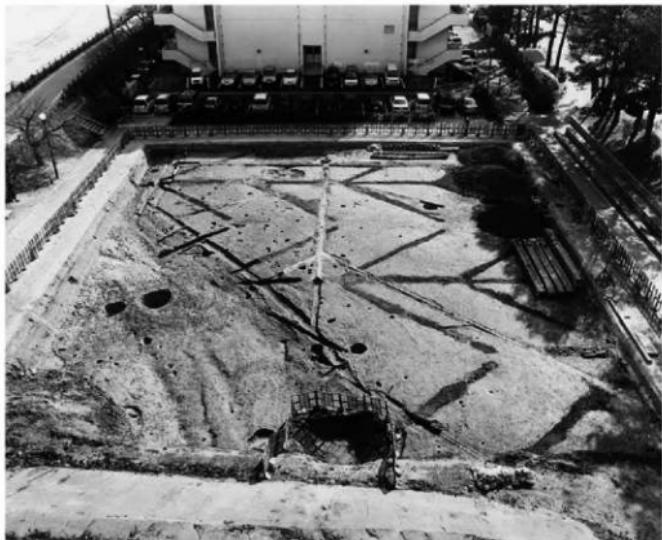


Fig.5 I 区土層図 (1/40)



Ph.2 I区南半全景（北から）



Ph.3 I区東半（御笠川を望む 西から）



Ph.4 I区南半旧河川検出（北西から）



Ph.5 I区西半（丘陵部を望む 北から）



Ph.6 I区北半全景（北から）



Ph.7 I区北半全景（南から）

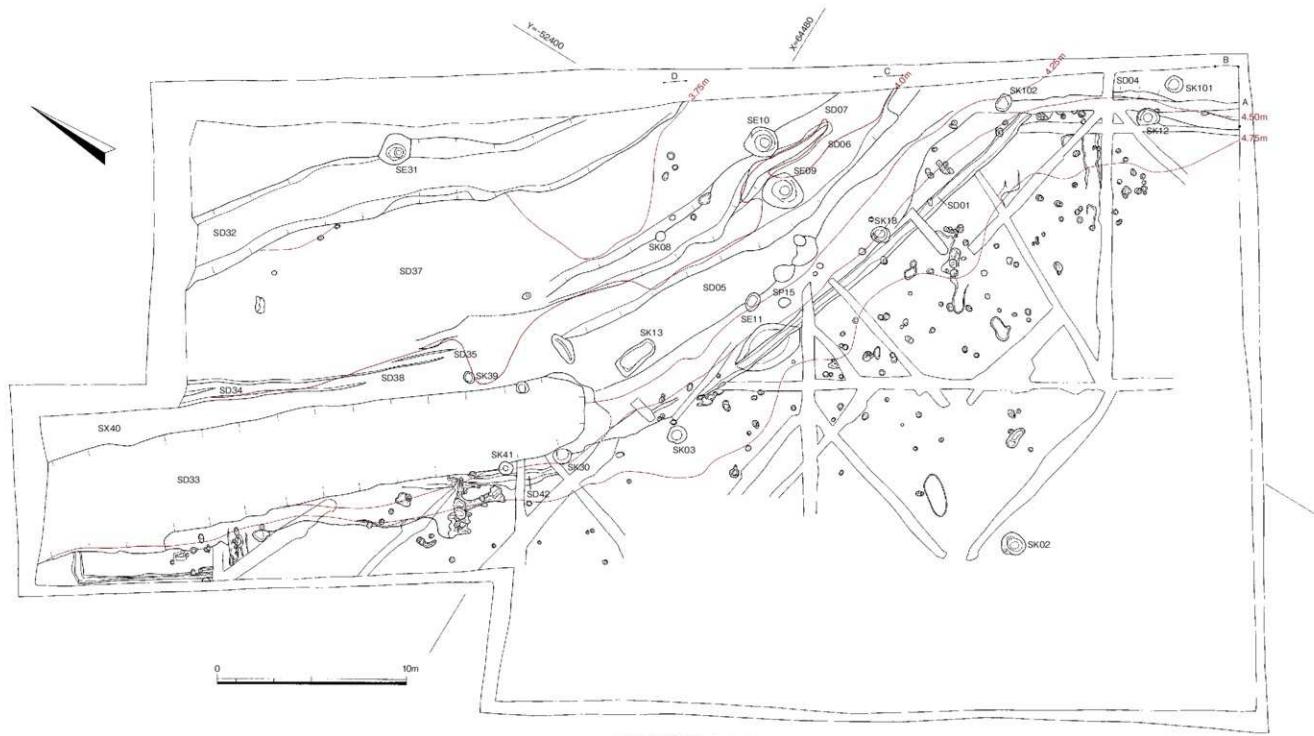


Fig.6 I区遭構配置図 (1/200)



Ph.8 I区北半旧河川（南西から）

(2) 遺構と遺物

溝 (SD)

調査区中央を北西方向へ延びていくSD05と以東の平行した数条の溝は一連の旧河川流路とみられる。この岸近くの下底は急激な流れによって削りこまれ、河道がその都度幾分変わっていったことを窺わせる。

SD01

現代水路である。幅60cm、深さ15cmの規模である。旧河川に沿って北西方向へやや湾曲して延び、同じく現代まで使われていたSD33に連結している。南側は現在の御笠川と同方向の調査区に平行したSD04に沿っている。

出土遺物 (Fig8) 現代の遺物に混じり近、中世の遺物を含む。Fig8の1は備前壺の口縁端である。2は灰白色を呈した瓦質土器である。外面には横位のハケメがみられるが、内面はあれて摩耗している。

SD33

SD01と連結した現代水路である。調査区の中央部から深く掘削されて幅6mの規模で北西方向へ延びる。Fig3の昭和初期の地図にみられる水路と考えられる。深さは約80cmまで下げたが、下底までは検出しなかった。

SD04

調査区南側で検出された流路部分である。縁は暗渠によって破壊されている部分が多いが、調査区に沿って直線的に延びるとみられる。水路か旧河川の岸か判然としないが、東側へ緩やかに傾斜して

いるので後者と思われる。下底近くの6層以下(Fig5 A土層)に中世末の遺物を含む。

出土遺物(Fig8) 3は陶器碗である。内面と外面の中位まで施釉されている。高台の際は強く削り出され、豊付きには糸切り痕が残る。2次火熱の為か釉は白濁劣化し、胎土も赤変している。4は龍泉窯系青磁である。内面見込みに草花文状の印刻があり、外底に墨書の一部が残る。釉は高台豊付きまで施されている。5は青磁である。厚い施釉は青味がかっている。6、7は備前摺鉢である。6は端部を丸く収めているのに対し、7は面をなす。7の外面は2次火熱を受け白濁している。8は土鍋の取手と思われる。断面楕円形の取手が口縁部を挟むように付けられている。遺存する取手の部位はやや外反して上方に延びる。内外面にススが付着し、黒色を呈す。9は丸瓦の端部である。外面に平行タタキ痕を明瞭に残す。内面の模骨痕や布目はほとんどナデ消されている。灰白色を呈し、胎土は2次火熱を受けたためか赤変している。10は椀形鍛冶滓である。

SD05

SD01東側の傾斜した部分をSD05とした。SD04からSD05へ西側に大きく振れて移行するように旧河道と溝は方向を変えている。SD05の埋土には近、現代の遺物まで含むが、SD04のように中、近世の遺物も比率的には多く含む。

出土遺物(Fig9) 11~19はSD04、05にかけての出土遺物である。11の土師皿は口径9.3cm、器高1.0cmを測る。摩耗し不明瞭であるが、外底部はヘラ切りか。12の瓦器碗底部は著しく摩耗している。13は白色を呈した瓦器碗である。摩耗が著しく調整不明。15は無施釉で明灰色を呈した須恵器の壺である。高台際が強く削り出されている。胎土は極めて緻密である。14は玉縁の白磁碗である。16は土師質の釜である。胎土は砂粒を多く含み脆弱である。鋤の付けねに刺突痕や指押さえの痕が残る。17は滑石製石鍋。18の平瓦は凸面に斜格子のタタキ文を残し、凹面にも布目が明瞭に残る。凸面は灰白色を呈すが、凹面には黒変した部分がみられる。19は椀形鍛冶滓である。

SD06、07

SD05のさらに東側部分の流路である。比高差25cm内で幅3~4.5mの溝状ないし階段状となっている。SD06の最下には黄褐色に酸化した砂層が堆積していた。この流路部分に掘削されたSE09、10の壁際の観察では下層に無遺物で流木を含む白色粘土層が堆積していることが判り、古期の流路部分があると考えられる。

出土遺物(Fig10)

SD06出土遺物(20~33) 20、21は黄灰色を呈した土師器碗である。22は赤褐色を呈した土師器碗である。内底部の境を凹状に深く押し回す。調整は摩耗し不明。胎土は精緻。23は黒色土器B類である。摩耗が著しく調整不明。24は黒色土器A類と思われる。低い高台の端部は丸く収める。25は白磁碗、26の白磁皿は内面に深い沈線を巡らせ、外面は中位でわずかに折れる。27は白磁碗である。28はオリーブ色に発した青磁碗である。外底部まで含む全面に施釉され、外底部に白色粘土の目跡が残る。29は緑釉陶器である。内面見込みに浅い圈線が施されている。高台内側を削り回して成形している。釉は劣化し剥落が多いが、高台豊付きは搔き取られ、高台内の外底部は拭き取られている。30は陶器鉢である。遺存する内面は施釉され、口縁部上面含む外面は部分的に拭き取られている。31は須恵器壺の頸部である。外面に波状文とカキメが施されている。32の陶器は外面に格子タタキ痕を残し、内面にはナデや指頭痕がみられ、アテ具痕は若干残る程度で消されている。内面無釉、外面は体部から底部にかけて黄緑色を呈しているが施釉の状態は不明。33は砂岩製砥石である。

SD06、07出土遺物(34~36) 34は黒色土器A類である。35の褐釉陶器鉢は30と同一個体と思われる。内面には釉が残るが、外面は火熱を受け釉が剥落し、胎土が赤変している。36は砂岩製砥石である。

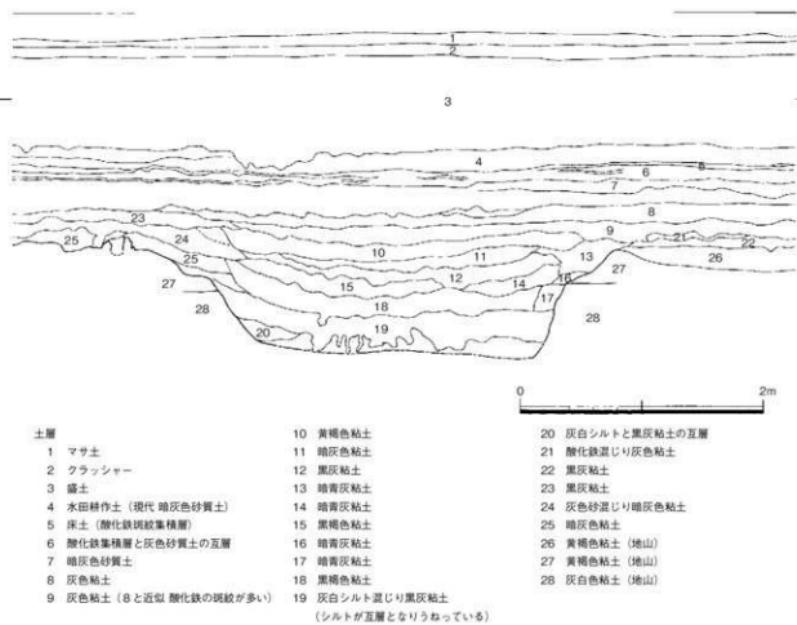


Fig.7 SD32土層断面図（1/40）



Ph.9 SD32土層（南から）

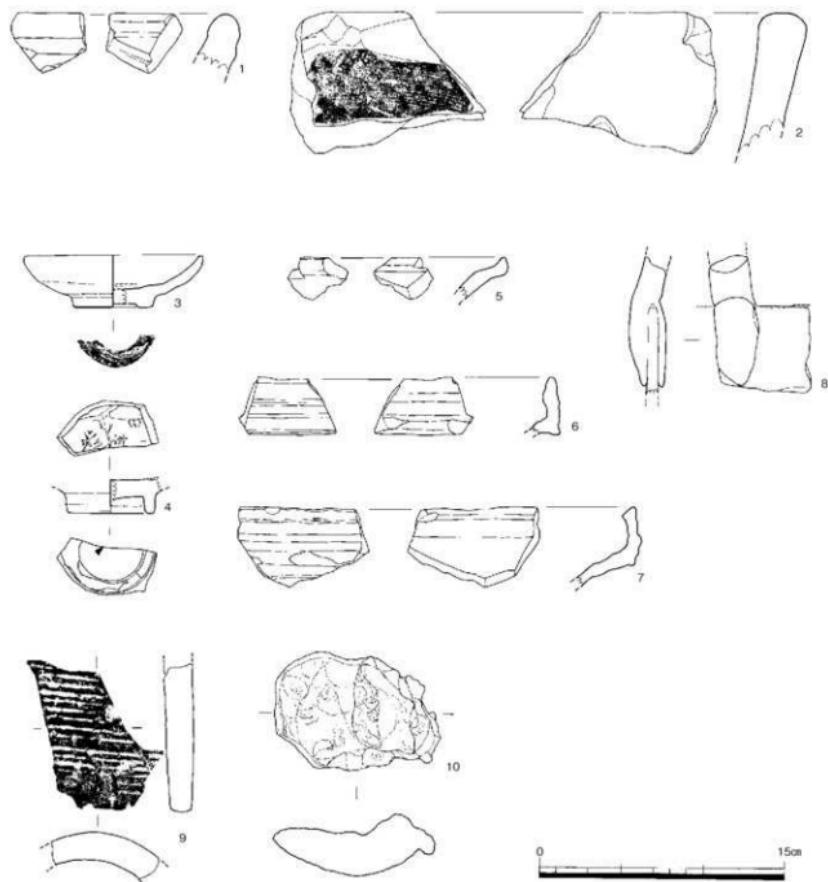


Fig8 SD01、04出土遺物実測図（1/3）

る。1箇所の破面以外は磨かれている。図示した平面左際に敲打により凹んだ部分が認められる。

SD07出土遺物（37～41）37の土師器椀は内底部のみが円形に炭化し黒色を呈す。38は黒色土器A類、39は土師器椀である。40の須恵器坏蓋の外面上にはヘラ記号が刻まれている。41平瓦は凸面に細かい斜格子のタタキ、凹面は布目を残し、黒色に焼されている。

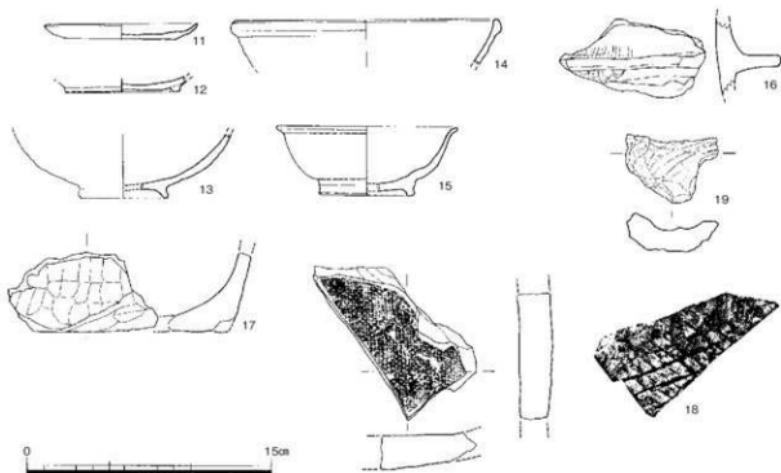


Fig.9 SD04、05出土遺物実測図 (1/3)

SD32

調査区北半の旧河川内で検出された。蛇行しながら旧河川と同方向へ走行する。幅3m前後、深さは北端で85cm、南端で46cmを測る。下底のレベルは調査区内で30cmの北高差で北へ傾斜している。掘方は地山近くの22、25層から切り込む。埋土は黒褐色層からなり、砂層はみられず、下底にうねった灰白粘土層が堆積している。

SD34~40

旧河川西岸の流路である。SD34、35、36は幅50cm程度で深さ5~10cmの小溝の形状を呈す。SD38~40は現代水路SD33の東側の傾斜地である。特に下層の堆積土部分をSD40と称した。SD37は旧河道内のさらに東側の部分を称す。この範囲は平坦に近く、さらに東側のSD32から深くなる。

SD34、35出土遺物 (42~47) SD34とSD35は一連の流路とみられるが、一応記録はSD34出土44、45、46、SD35出土が42、43、47と分けた。42の土師皿は復元口径11.0cmを測る。43は土師器挽、44は器面が剥落し不明瞭であるが、黒色土器B類の可能性がある。45は灰白色を呈した土師器挽である。46は黒色土器B類である。47は須恵器坏身の受け部である。

SD37出土遺物 (48) 48は土師質の羽釜である。外面の鈎から以下に煤が付着している。

SD38、40出土遺物 (49~51) 49はSD38出土の白磁碗である。50、51はSD40出土である。50の丸瓦は凸面に斜格子タタキと緊縛した紐状の痕跡がみられる。凹面はナデが加えられているが布目が部分的に残る。両面、青灰色を呈しているが、一部に黒色に炭化した部分がみられる。51は弥生時代の磨製石斧である。火熱を受けた為か器面が赤みがかる。ローリングを受けているが、片面の大きく剥離した部分の摩耗は2次的な利用を受けている可能性がある。

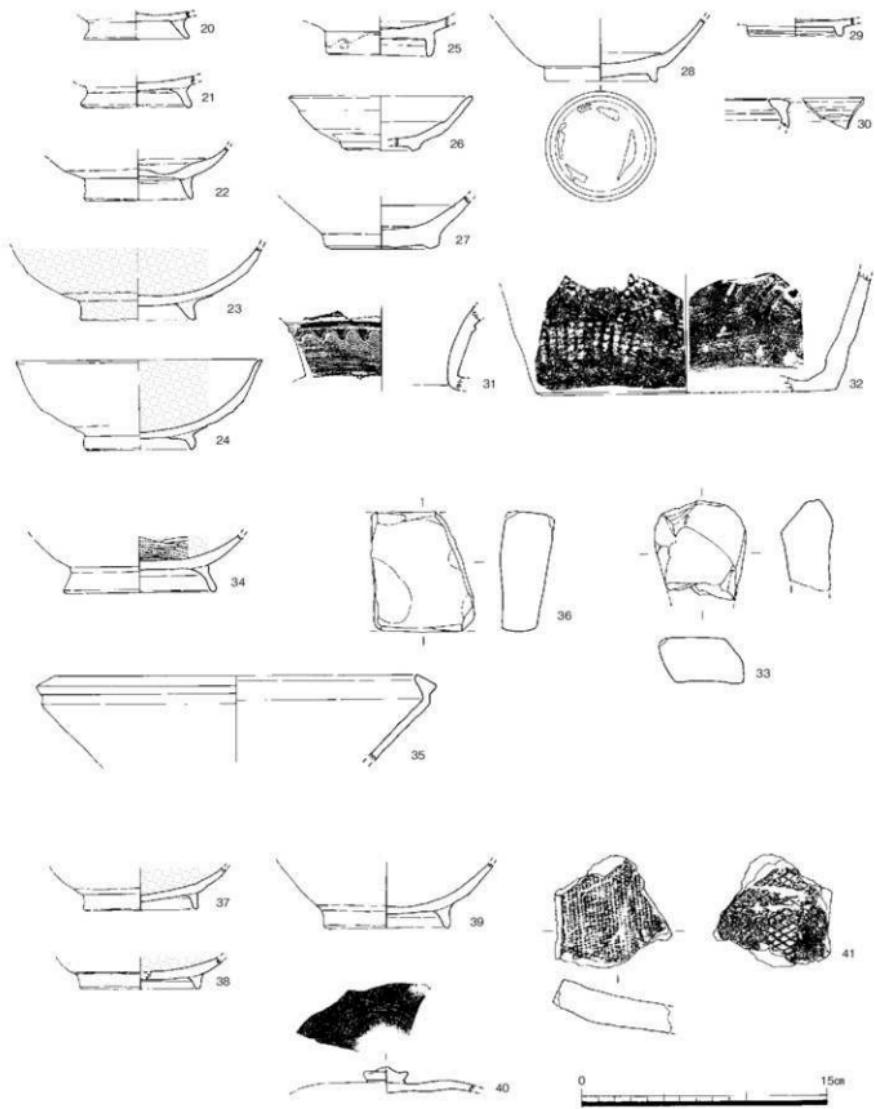


Fig.10 SD06、07出土遺物実測図 (1/3)

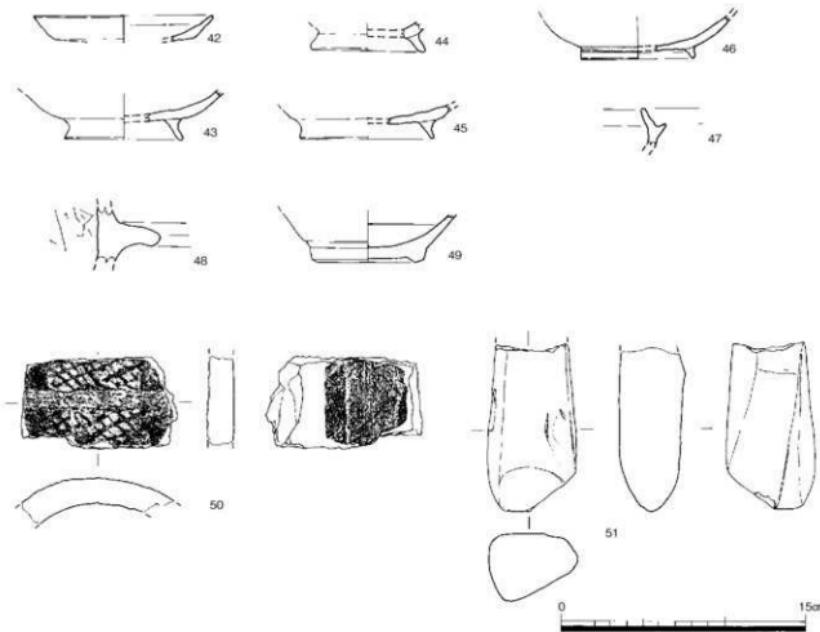


Fig.11 SD35、SX40出土遺物実測図 (1/3)

井戸 (SE)

形状や規模から井戸と考えられる土壌は4基検出された。すべて旧河道内に掘り込まれている。

SE10

旧河道内でSE09と近接して検出された。径150cmの円形プランを呈す。深さは約1mを測り、壁が2段掘り状になっているのは掘り込んだ黄褐色土～灰白色粘土層中に流木が含まれ、これを露出するために掘りすぎたことによる。本来は摺鉢状で下底は40～50cmの楕円形となる。

出土遺物の58は黒色土器B類である。高台はやや外湾しながら延び、端部は丸みを帯びる。

SE09

上述のSE10と近接しているが、規模は大きい。径200～240cmの楕円形プランを呈し、深さは130cmを測る。壁は摺鉢状に窄まっていき、下底に径55～65cmの円形の井筒の痕跡が認められた。壁にはSE10同様に掘り込んだ下層の黄褐色～灰白色粘土に含まれている流木が露出した。

出土遺物（52～57） 52は土師器坏である。外底部はヘラ切りで、板状圧痕が残る。外面の体部下位にはヨコナデによる凹凸が明瞭に残る。53は黒色土器A類である。長い高台の端部は少し外反する。54も黒色土器A類である。内底部は凹み、内面に細かいミガキがみられる。55は土師器壺である。外面に煤が厚く付着している。その下にナデ上げた指頭痕が深く密に残る。頸部付近にはその前の調整である横位のハケメが残る。内面は口縁部ヨコナデ、体部はナデ調整を施すが、膨らんだ体部下位にかけては強いナデが加えられている。54は土師質の鉢である。内外面の一部にハケメが残るが、大半がナデ消されている。外面は赤褐色、内面は黒色に炭化している。57は木製の櫛である。

SE31

調査区東際の旧河川内で検出された。径165～185cmのやや楕円形プランを呈す。深さは240cmを測り、粘土層を抜いて砂層まで達する。壁は急な傾斜角度で掘り込まれ、下底近くは径50cmの円形となる。出土遺物は無い。

SE11

旧河川の西際で現代水路のSD01に切られていた。プランは径2.1～3.1mの楕円形を呈す。深さは140cmでグライ化した緑灰色粘土中にとどまる。壁は北側が直に近いに対し、南側は傾斜し、最深部は北より中央の径70～80cmの範囲とみられる。下底近くに平石が1個出土した。埋土は暗～黒褐色土で井筒等の痕跡は検出されず、性格は不明である。

出土遺物（59～61）

59は陶器である。外面体部のI部に緑黄色の釉がみられ、底部は火熱により白濁している。外面底部と体部の境には重ね焼きの粘土付着がみられる。60は白磁碗である。大宰府分類のV-4aに該当する。口縁端部が水平に近く外反し、外底部はコマ状に中心に向け突出している。61は龍泉窯系青磁である。高台疊付きと内側の外底部は露胎である。図示した他に蘿羽口のガラス化した部分と鍛治漆が出土した。

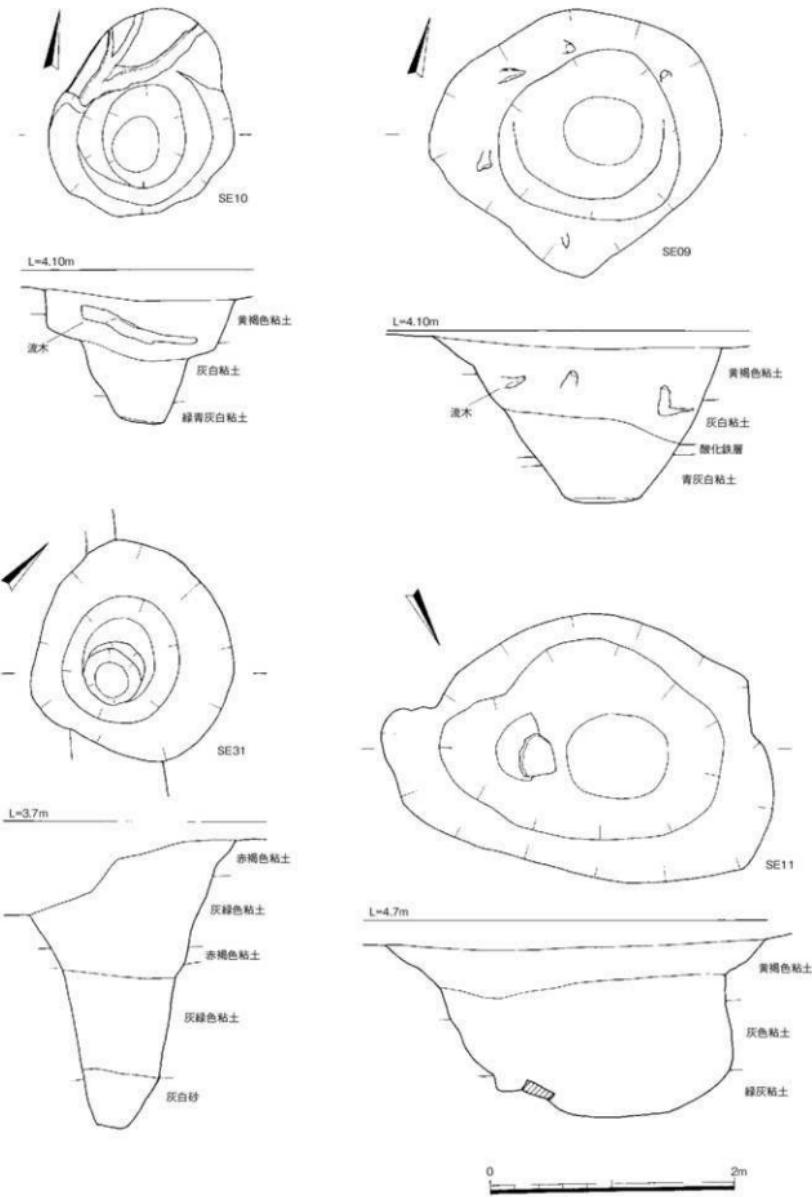


Fig.12 SE10、09、31、11実測図 (1/40)

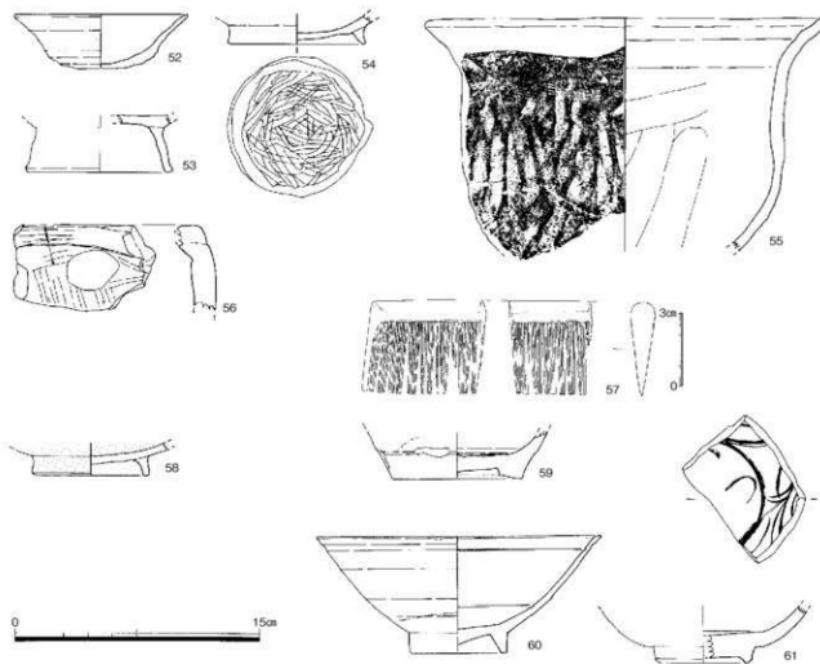
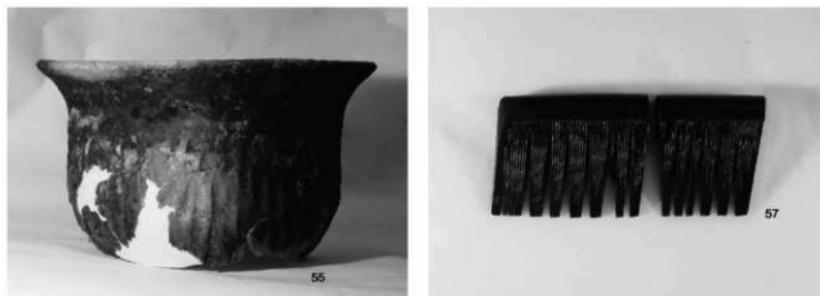
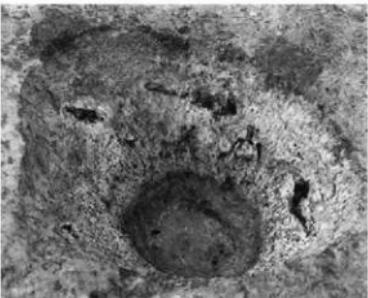


Fig.13 SE09、10、11出土遺物実測図 (1/3)

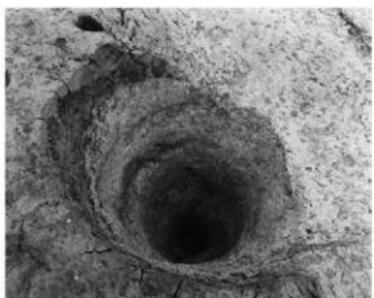




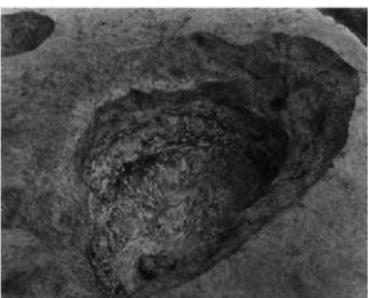
Ph.10 SE10井筒検出



Ph.11 SE09井筒検出（南から）



Ph.12 SE31完掘（北から）



Ph.13 SE11完掘（北から）

土壤 (SK)

ここでは径120cm以下の土壤を取り上げたが、この中には柱穴の大型のものも含まれていると考えられる。分布をみると柱穴等の遺構同様にSK02以外は削平を比較的免れた旧河川西岸際に集中している。

SX103

旧河川西岸近くのSD01付近で検出された。長径75cm、短径45cmの楕円形プランを呈す。上面に厚さ2cm程度の炭層が堆積し炉跡と思われる。

SK39

現代水路SD33の東際で旧河川内で検出された。径60cmの円形プランで、深さ70cmを測る。壁は直に近く、大型柱穴と思われ、約3m離れた位置に同規模の土壤が検出された。

SK102

旧河川内のSD04が西側へ振れていく変換点付近で検出された。径75~100cmの楕円形プランを呈し、深さは上部が削平されたためか約16cmの浅さである。

SK30

現代水路SD33の西岸際で検出された。同じ西岸の約3m離れた位置と対岸でもSK39を含む2基の同規模の土壤が検出された。しかし、この4基の組み合わせでは柱列が歪となる。

SD33に切られているが、上端で径1m、下端で径60cmの円形プランを呈す。深さは30cmで下底から63、66の土師器が出土した。

出土遺物 (62~66) 62は土師器壺で半分の破片が出土した。口縁端部が内傾し、底部は丸みをおびる。調整は内外面ともにナデとみられ、外面に細かいハケメが一部残る。褐色を呈し、焼成は脆弱である。砂粒は63に比べ多く含む。63は完形の土師器壺である。丸底から直に近く体部が立ち上がるが、中位でわずかに外反している。器面が剥落しているが、内底部ナデ、外底部ハケ後ナデ調整。体部はミガキの可能性がある。赤褐色を呈すが、外底部の2/3程に黒斑がみられる。胎土は砂粒をほどんど含まず緻密。64は土師器高壺である。胎土は砂粒を多く含み粗い。65は土師質の壺である。口縁端部は細くなり丸く収められている。内外面の器面が剥落し、摩耗しているため調整は不明。明黄灰色を呈し、胎土は砂粒が少なく極めて緻密な精製品である。66は土師器甕の底部である。外面はハケ後部分的にナデ、内面はナデ調整である。外面は黒色~暗褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む粗製品である。

SK18

調査区南寄りの旧河川西岸際で検出された。上端は径80~110cmの楕円形を呈すが、下端は径60cmの円形となる。深さは約40cmを測る。

SK14

調査区南寄りの旧河川西岸際で検出された。近くにSK15、16、SX11の土壤が掘られている。上端は径80~100cmの楕円形プランを呈し、下底は45~60cmに窄まる。

SK101

調査区南東際で検出され、SK12が近接している。上端は径90cmの正円形に近いプランで、下底は径約60cmになる。

SK03

調査区中央で検出された。上端は径1mの正円に近いプランである。下底は径55cmに窄まる。出土遺物の68は土師器甕の口縁である。内面体部はヘラ削りを施す。

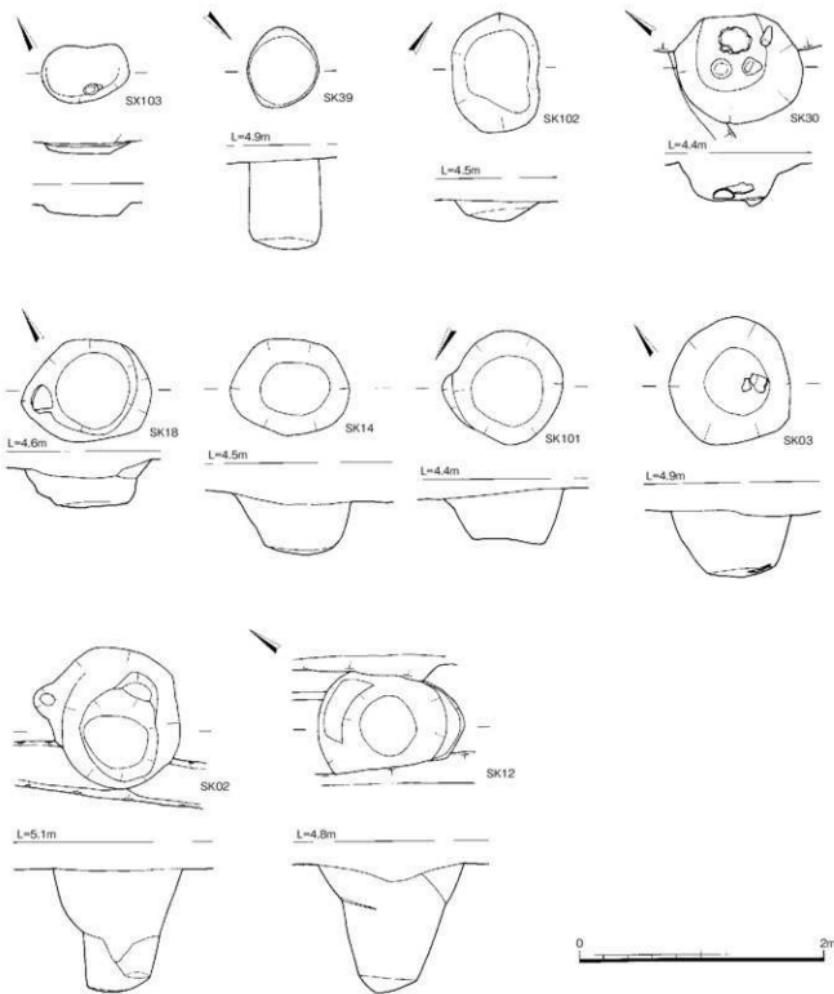
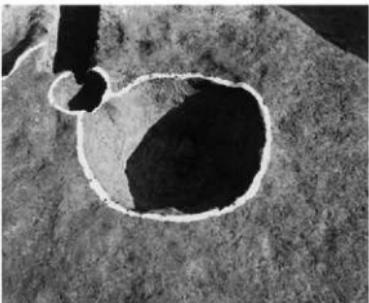


Fig.14 土壌 SK103、39、102、30、18、14、101、03、02、12実測図 (1/40)



Ph.14 SK03遺物出土状況



Ph.15 SK03完掘状況



Ph.16 SK02完掘状況



Ph.17 SK12完掘状況（北から）

SK02

調査区南西で検出された。この付近は深く削平を受けているために遺構が消滅しSK02は単独的に検出された。上端径約1m、下底で径50cmとなる。深さは約1m遺存する。出土遺物の67は土師器甕の口縁部である。

SK12

調査区南東際で検出され、SK101に近接している。暗渠で切られているが、上端径は約1m、下底は径50cmの円形プランを呈す。深さは約1m残る。出土遺物の69は黒色土器A類である。

SK15

SK14、16と近接して検出された。出土遺物の70は白磁碗である。遺存する外面は露胎で、底部に墨書があるが薄れて判読できない。71は青磁皿である。体部中位で外反している。釉色は緑がかるオリーブ色で、内面はすべて施釉され、外面高台付近の体部から以下は露胎である。内面見込みと外面高台近くの体部に砂目跡が付着している。72の平瓦は胎土は白色を呈し、軟質であるが、器面はすべて黒色に焼されている。

SK08

調査区中央の旧河川内で検出した。径40～50cmの方形に近い梢円形を呈した掘方内に土師器甕73が

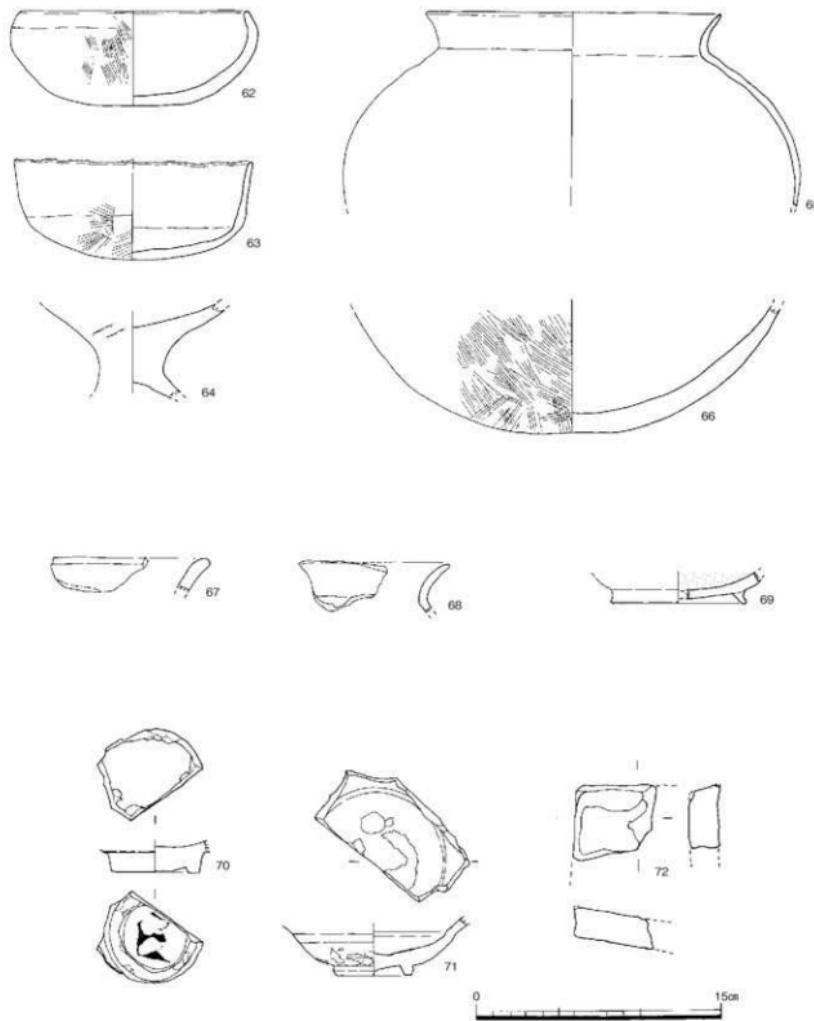
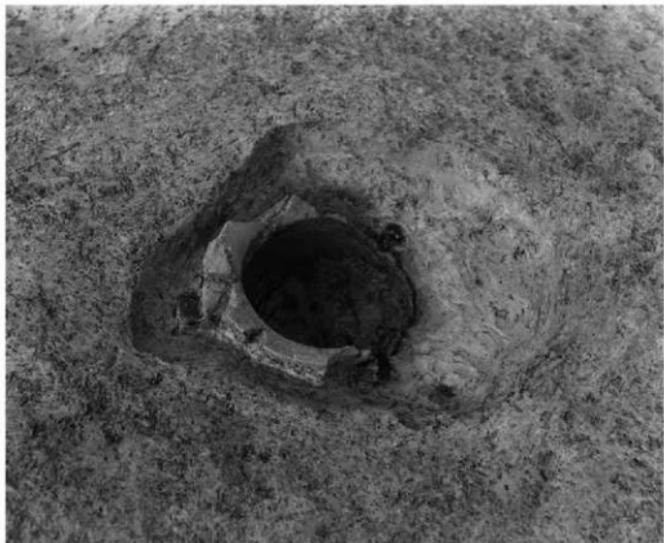


Fig.15 SK30、02、03、12、15出土遺物実測図 (1/3)



Ph.18 SK08甕出土狀況



Ph.19 SK13土層斷面

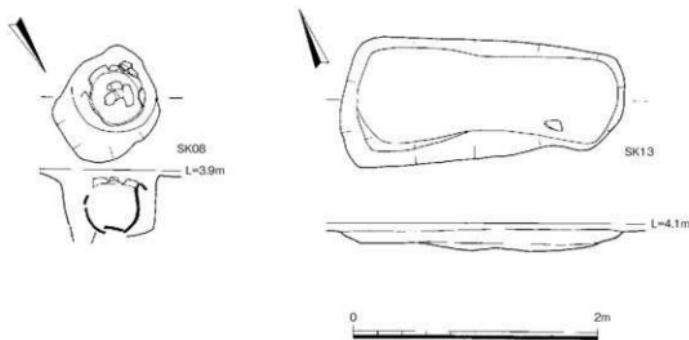


Fig.16 SK08, 13実測図 (1/40)

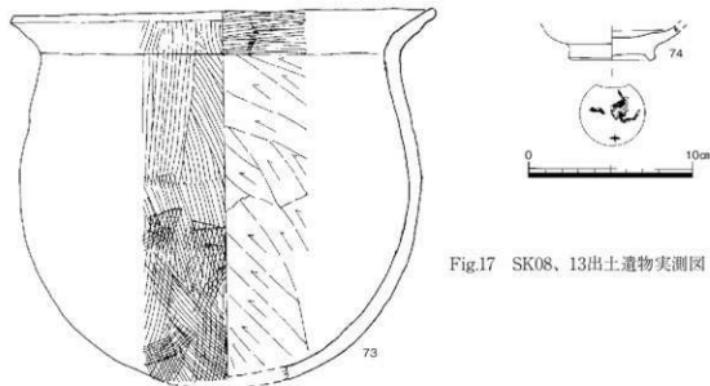


Fig.17 SK08, 13出土遺物実測図 (1/3)

埋置されていた。正置の状態で底部は崩れ、その底部際の掘方内に灰色粘土塊が検出された。

土師甕73は完形に近いが体部の一部から底部にかけて欠損する。外面は体部下位は赤変し、上位に煤が付着している。内面のヘラケズリの痕跡は弱く、砂粒があまり動いていない。

SK13

調査区中央の旧河川内で検出された。長軸が旧河川方向の地形の傾斜に平行している。北側が幅広く107cm、南幅78cm、長軸長230cmを測る方形プランを呈す。壁の傾斜は緩く、底面は北側が高くなっている。土壤墓の可能性があるが、副葬品は出土していない。

出土遺物74は青磁碗である。高台疊付から内側は露胎である。外底部に墨書がみられるが、判読できない。

3 II区の調査

丘陵の西側に位置した野球場内である。事前の試掘によって、北東部の限られた範囲が調査区に設定された。しかし、事前の試掘は野球場が使用中のために限られた範囲で行われ、調査による成果と異なる部分がある。特に調査区南側は丘陵裾部が広がり遺構は水路等に限られ少ないながらも分布していることが発掘調査によって判明した。西側は調査終了後の試掘も含め比恵遺跡群の占める洪積台地との間を隔てる谷部（旧河道）がグラウンドの西端までの範囲を占めていることが確認された。

(1) 基本層序と地形

野球場の整地土を含めた盛土が50cm厚さで堆積し、その下に現代水田耕作土がみられる。さらに下層に酸化鉄集積層（床土）と灰色砂質土ないし粘土層との互層が堆積し、その下部が地山の明赤褐色粘質土となる。遺構検出面である地山の明赤褐色粘質土は標高4.0m前後で南北50mの距離で比高差20cmの緩い勾配で北へ傾斜している。

(2) 遺構と遺物

検出された遺構は水路3条で、そのほか谷部と旧河道が確認された。遺物は極めて少なく、中近世に限られる。集落に関係した遺構は無く、旧河道SD04の落ち際を中心には灰黒色粘土のピット状の堆積土は木痕もしくは流水によって搅拌された自然堆積土である。



Ph.20 II区全景（南東から）

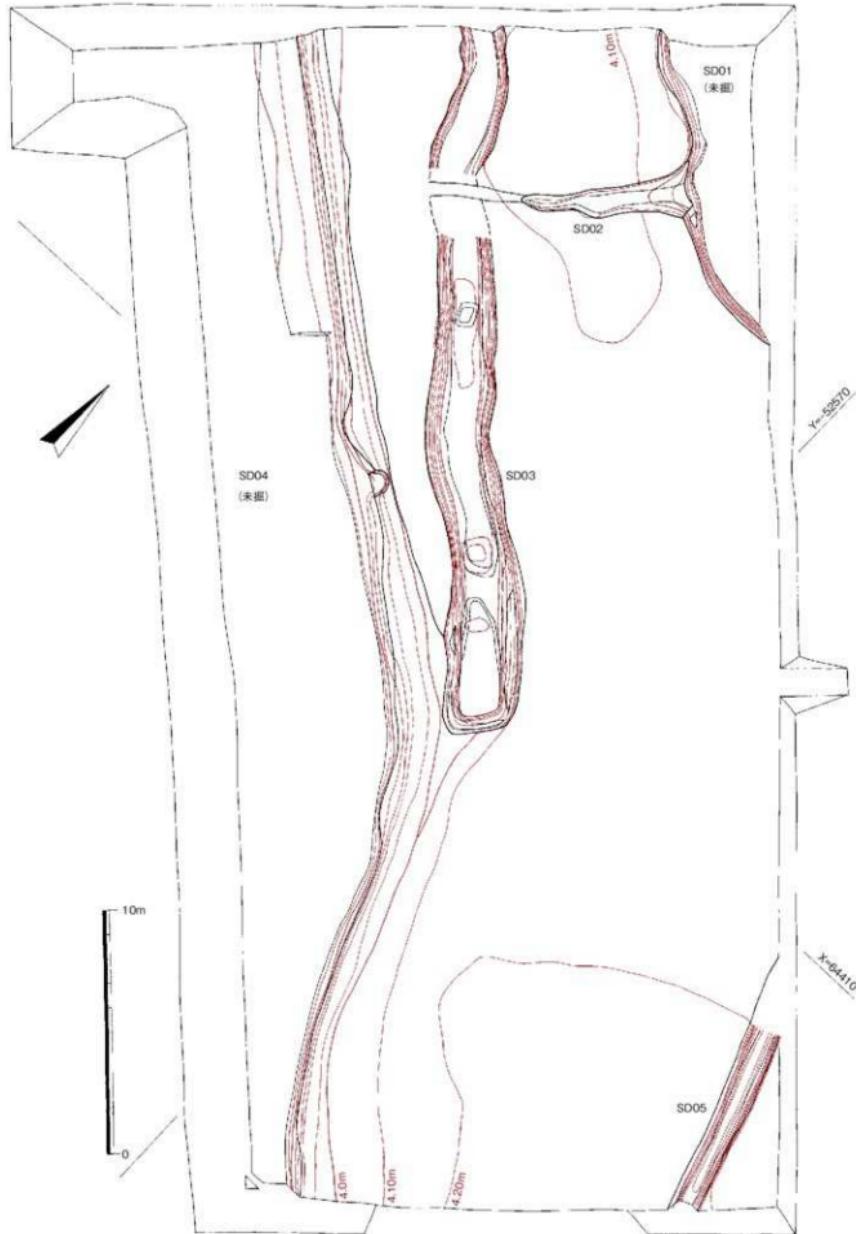


Fig.18 II区遺構配置図 (1/200)



Ph.21 II区全景（遠景 南東から）



Ph.22 II区全景（丘陵を望む 西から）



Ph.23 II区全景（西から）

SD01

調査区北東隅で検出された。「福岡市土地分類調査」の地形分類図 (Fig.4) や昭和初期の地図 (Fig.3) によれば丘陵の西際を御笠川の旧河道が開析しているのが見出せる。SD01はこの流路とみられる。埋土にはシルト～砂層がみられ、激しい水流をうかがわせる。下底は急勾配で深く調査区内で検出することは困難であった。東側に深くなっていくSD02から切られている。出土遺物は無い。

SD02

調査区北側でSD03と直行して、これを切り、また、SD02も切っている。西側に浅くなつて途絶えているが、東際では幅4.9m、深さ75cmまでの規模となっている。埋土は灰色シルト～粘土層が堆積し、最下底は強グライ化している。出土遺物の75は白磁である。全体に粗雑な作りで、釉色は少し灰～黄色がかり、ピンホールがみられる。高台骨付とその内側は露胎である。高台内側の底部には荒い回転ヘラケズリ痕を残す。76は陶器摺鉢である。遺存する部分は無釉で明赤褐色を呈す。

SD03

南北にわたり直線的に掘削されているが、中央部で急に途切れている。幅約3mを測るが、北際で幅1.6mに減じている。深さ約50cmが残り、比高差約10cmで北側に若干深くなる。溝内に現代電柱のアンカー材がきれいにはまつた状態で出土した (Ph.27)。しかし、土層からみたSD03の掘り込みは近、現代の水田耕作土層の下層からとみられ、このアンカー材は上からの切りこんだ掘り込みに含まれるものと思われる。



Ph.24 II区SD02土層断面（調査区東壁SD01と切り合い 西から）



Ph.25 II区SD03 完掘（南東から）

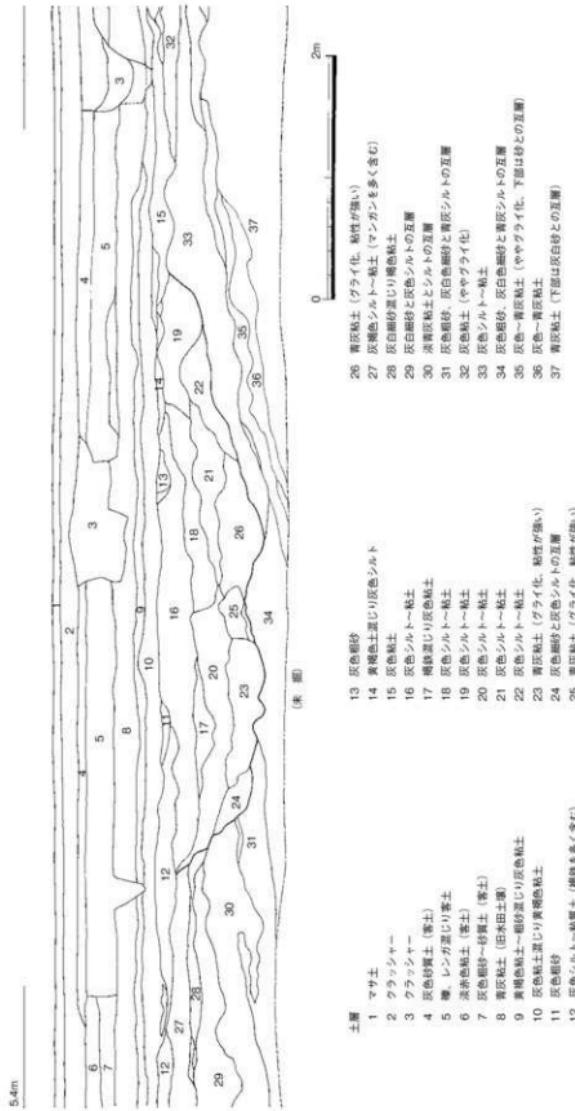


Fig.19 SD01, 02 土壌断面図 (1/40)

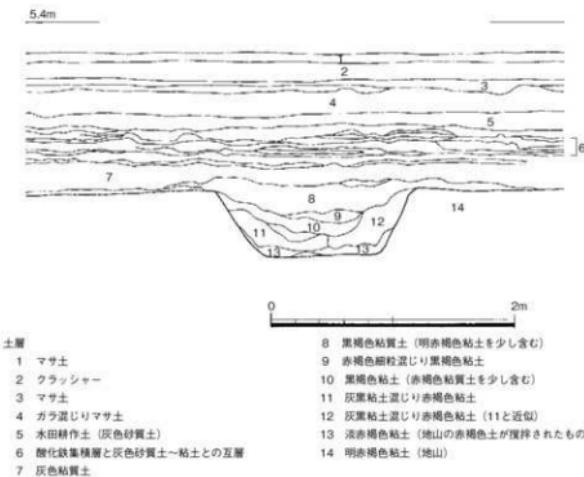


Fig.20 SD03土層断面図 (1/40)

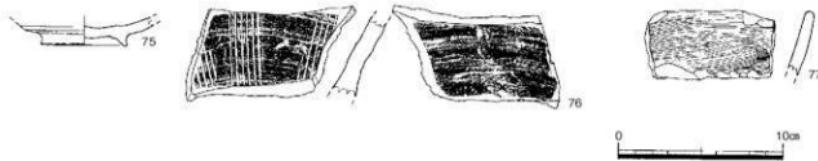


Fig.21 SD02, 03出土遺物実測図 (1/3)

SD03は条理の方向に則しているが、昭和初期の地図ではこの1町西側には水路が平行して走行している。

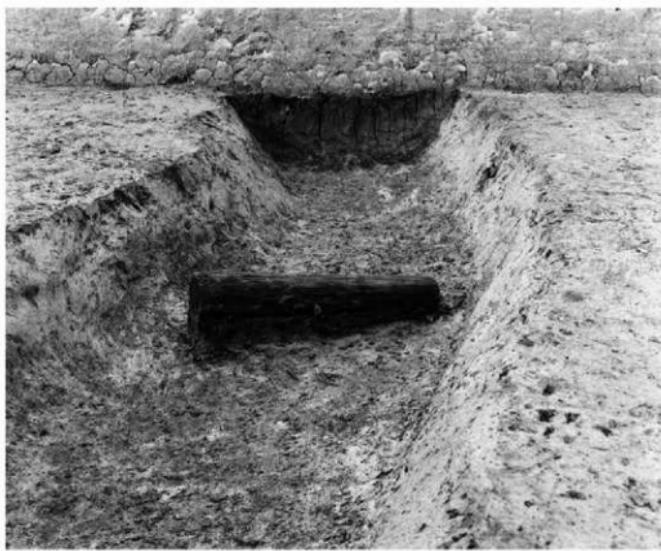
出土遺物の77は土師器鍋である。直口した端部は窄まり丸くおさめられる。外面に煤が付着し、内面には横位のハケメが残る。

SD04

調査区西半から少なくとも野球場の西端にまで及ぶとみられる谷部である。この谷部は現在までの試掘や調査成果から西側の洪積台地に占める比恵遺跡群と本調査区を含む山王遺跡群との間に幅約100mに及んで形成されていることが判明している。南北の延長は不明であるが、東側の御笠川の旧河道とみられるSD01より古期の河道であった可能性もある。しかし、出土遺物は無く埋没時期は不明である。



Ph.26 II区SD03土層断面（南から）



Ph.27 II区SD03内出土アンカースタッフルーム（南から）



Ph.28 II区SD04東岸際（調査区北壁 南東から）



Ph.29 II区SD04東岸際（調査区南壁 北から）

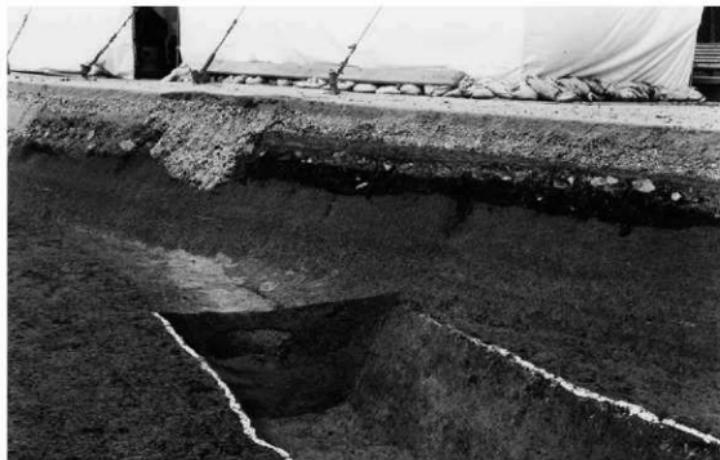
今回の調査では調査区の設定が狭く調査期間、費用の制約があったために、東岸の南北延長48m、幅2~7mの範囲にとどまる。

東岸のラインは少し蛇行はあるが、北西に向かって走行している。東岸より東側の落ち際付近は緩やかに傾斜し、アズキ色の粘土からなるピット状の堆積がみられた。この堆積土からの遺物は無く、形状からも木根や水流により攪拌された堆積層とみられる。

調査区南壁の観察 (Fig.22) では客土、現代水田土壤の下層からややグライト化した土層がみられ埋没後も水はけは良かったものと思われる。落ち際ではアズキ色の粘土が堆積し、以下に青灰色の強グライト化した粘土がみられ、基底は灰色~淡黄褐色粘土となる。東岸際を深さ1m程まで露呈し、一部を検出面から約3m下げたが西へ急勾配で傾斜し下底までは検出できなかった。掘り下げた埋土は粘土層からなり、砂層はほとんどみられない。東岸には部分的に護岸の杭が打ち込まれていたが、遺物が無く時期はおさえられなかった。

SD05

調査区南東際で検出された水路である。直線



Ph.30 II区SD05土層断面（南西から）

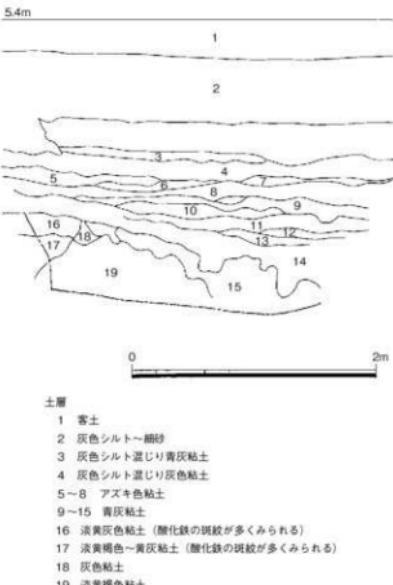


Fig.22 SD04土層断面図 (1/40)

的に略北へ旧河道に向かって走行している。幅110cm、深さ60cmを測り、埋土はシルト～砂層からなり激しい水流をうかがわせる。

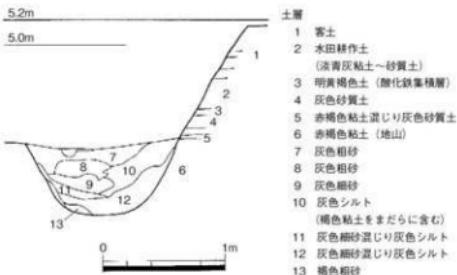
出土遺物は無いが、掘り込みは現代水田土壤、その下層の近現代の水田土壤と思われる酸化鉄集積土層との互層のさら下層からみられる。

IV おわりに

丘陵の東側には10世紀以後中世にかけての遺物が多く出土し、集落の中心的な時期を示している。検出された遺構の中で最も古くみられるのはSK30やSK08と思われ、6世紀代であろう。しかし、旧河川内からは51の弥生時代の磨製石斧も出土し、また、甕棺片も以前に表採されたということから弥生の遺構も存在していると考えられる。その後、近世になると旧河川が開削し、水田が形成されていったものと考えられる。なお、検出した旧河川の下底より下層には無遺物のさらに古い流路があるものとみられる。

本文Ⅱで記したように丘陵は『福岡県神社誌』の記述を含め前方後円墳の可能性があるが、今回の調査では関連するような遺物の出土はみない。

丘陵西側では集落が形成された痕跡はみず、中世後半以降に灌漑施設が活発に整備されていったものとみられる。比恵遺跡群との間を隔てる谷についても埋没していった時期が不明であるが、比恵遺跡群側からの落ち際には遺物が多く含まれる可能性もあり、今後の調査に期待される。なお、埋没後も水田として利用されていったが、土層から湿潤な土壤であったものと思われる。



報 告 書 抄 錄

山王遺跡 1

—山王遺跡群第2次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第878集

2006年3月15日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 株式会社タマキ印刷